

---

# 此処から始まる物語

黒鳳蝶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

此処から始まる物語

### 【Nコード】

N0438Y

### 【作者名】

黒鳳蝶

### 【あらすじ】

これから始まる物語。 此処から始まる物語。 これは僕と私が紡ぐ物語。

15歳の少女リナリアは、ある日突然戦争に巻き込まれてしまう。

それでも何とか国の王女を守り、ファレノプシス王国の復興を夢見て逃亡が続けていたが、遂に追い詰められ、捕まってしまう。

其の時突然救いの手が！

- ・ 男性主人公が登場するまで長いです。
- ・ 百合入ってます。
- ・ 途中から主人公最強になります。
- ・ 主人公性格 & a m p ; 口調が変わります。
- ・ 文が稚拙です。
- ・ ストーリー掴みにくい可能性が。

↓ 精進します。

それでも“読んでやるか”って方はどうぞ。

## 始まるためのエピローグ1（前書き）

とりあえずプロローグ以前の物語なので色々すっ飛ばしてます。

### 注意点

- 1    :   話の展開が急過ぎる。
- 2    :   話がかなり細切れになっている。
- 3    :   つまり文章が稚拙。
- 4    :   百合属性がいる。  
          e . t . c . . .

苦手な人はお引き取りください。痛い目に逢います。トラウマです。

それでも生温かい目で見守ってやんよって人はドゾ。

## 始まるためのエピソード1

僕がしたことは正しかったのだろうか？僕は未だ生きている。情性で生き続けている。

・・・、僕が生きている意味は何だ？僕が生きる理由は何だ？

僕に懇願した少女の顔が今でも鮮明に思い出せる。

終わらせて欲しいと。

全てを終わらせて欲しいと願った少女の顔が・・・。

宝石のような木々の翠が、僕を優しく包んでいる。

「リイナ、もうすぐ始まるよ。」

親友のセルフィが声をかけてくる。

私はリナリア・エル・シルヴィア・アイゼンハウル。長い名前からも判る通り名門貴族の令嬢だ。そして今日は魔導師の名門校“旧イヴァン帝都学院”中等部の卒業実技試験だ。ルールは簡単。“エメラルの森”の中半径6？の結界内に教師陣が隠した偽（？）宝珠“プレ・オーブ”を探して戻って来ること。時間制限は4日間。それ以外のルールは無し。つまり、友人と協力してもよし、邪魔するもよし、漁夫の利もありつてこと。

私は友人3人と協力するつもり。1人は先程声をかけてきた、セルフィ・リン・ミハイル。もう1人はハリス・フェア・チャイルド・メルキュリア。2人とも水魔法を得意とするので、雷魔法を使う私と相性がいいのだ。

此处で捕捉。

“魔導師”と言うのは魔導術を生業とする者のこと。魔導術つてのは体内の生命力“プラーナ”を魔力“mana”へと変換して発動するもので、大きく2つに分けられる。そのうちの1つは“魔術”。魔方陣や印、呪文の詠唱など、術式に自分のmanaを通わせて発動する。基本的に自分の魔力は術式の起動にのみ使うのでmanaの消費は少ないが、高位魔術は起動にもコツがあるので難しい。日常生活で使う簡単な1級魔術から最高位難度の13級までにグレード分けされている。

もう1つは“魔法”。これは1人2属性のみ使える、術式不要の云わば超能力。稀に1属性しか使えない人もいる。私がそうだ。これは本人のプラーナに直接リンクしているため、その人のプラーナの性質によって使える魔法の属性が決まっているから。その属性とは、一般に“五大エレメント”と呼ばれる、火・水・地・風・雷で

ある。

また、魔術と魔法を組み合わせた運用法も魔導術と呼ぶ。

以上、捕捉でした。

「うん。この試験を合格クリアすれば卒業だね。」

「でも、毎年ケガ人出るってゆーし、全員が生きて帰れるワケでもないみたいだし……。」

セルフィが心底怯えた様に呟く。

「ちょっとセルフィ、脅かさないでよ。」

そう。教師の張った結界の中とはいえ、魔物はいるのだ。流石に生徒が協力しても勝てないような強力な魔物は事前に排除されているため、よっぽどのがない限り死ぬことはない。しかし、油断すれば大怪我をすることは必至なのだ。

「あれ、ハリスは？」

「ああ、事前に保険として此処に戻る転移術式を組んでるよ。彼曰く、転ばぬ先の杖だってさ。」

そう言ってセルフィは肩を竦める。いつも通りの飄々とした態度。しかし、用心に越した事は無いのだ。私はハリスの選択は正しいと思う。

と、そこに一人の金髪青眼の少年がやってきた。

「リイナ、セルフイ、あと5分で始まるよ。それとコレ。此処に戻る為の転移術式を封じた楠の枝。横に1本伸びている小枝があるだろう？それを折ると術式が発動するようにしてある。」

そう言ってハリスは私たちに枝を渡す。パツと見は何の変哲無い只の枝であるが、マナを視認できる私たちには複雑な術式が起動されるのを待っているのが解る。

「サンキュー、ハリス」杖じゃなくて枝なんだね」

「やかましい！」

「ハリス、ありがと。」

「どういたしまして。」

万一の命綱だ。私はそれを制服の内ポケットにしまった。

今私達がいるのはエメラルド大陸の4分の3を覆う美しい原生林“エメラルの森”の入口前の“旧イヴァン帝都学院合宿用校舎”の校庭である。此処から“エメラルの森”までは約100m程。校庭には未だ200名程が屯しているが、開始の合図と共に森へ踏み込むには、そろそろ出発した方が良さそうだ。

「じゃ、みんな揃ったことだし出発する？」

「私は賛成だよ、リイナ。」

「僕も賛成。この試験は早い者勝ちだからね。早く森に入った方が有利に決まってる。」

ハリスはそう言っていそいそと歩き出す。見た感じもうルンルンである。緩やかにパーマがかかった彼の短髪が揺れている。

エメラルの森までの道程で、私は長年付き合ってきた友人を感慨を以て見つめていた。まあ、同じ高等学校に通うのであるから別にどうということはないのだけれど。

セルフイは栗色の髪を高めのポニーテールにしている。背は170?近くあり、スレンダーな体型をして一見して快活なスポーツ少女と解る。事実、徒手空拳とトンファーを得物とする彼女は身体能力強化の魔術を駆使して圧倒的手数で敵を翻弄する。水辺では彼女の得意とする水魔法と相俟って学年でも上位の戦闘能力を有している。すこし戦闘狂の気がある。

ハリスはややソバージュ掛かった金髪を若干短めに揃えている。澄んだ青色の瞳と、整った顔立ちで女子に人気がある。本人はともセルフイが好きなようで。彼は支援系の魔術と、水・風の魔法で戦術的なスタイルを確立。得意な術式展開によって様々な状況に対応出来ると自負している。

・・・等と友人を観察しているうちに森の入口に到着した。

「さてと、学年最後の大行事、頑張りましょうかね。」

ハリスが前髪を払い、据わった目で試験場をにらむ。

「よし、私は気合い十分。」

セルフィの笑みが怖い。

「はぁ、頑張りますか。」

私は溜め息と共に不安を吐き出した。

リイナがこっちを見ている。若干内気な親友は驚く程の美人だ。純白の艶やかな長髪に、白磁のようなくすみの無い肌。芸術的な顔の作りと小柄ながら匂い立つような肢体。これだけの美貌を持ちながら恋愛経験が0なのは、恐らく彼女が内気な為に目立たないように行動しているからだろう。

魔法も魔術も平均的にこなし、目立つた事を嫌う内気な性格故に、彼女が雷特化の魔法を使う事や、指で結ぶ印と呪文の口内詠唱サイレント・スペリングを併用して通常の2倍のスピードで相手に術式を知られずに魔術を発動させる事が出来ることを私以外は知らない。

そう。他人から見ればリイナはちょっと内気な“普通の女の子”

なのだ。

「リイナ、そんなに熱心に私を見つめてどうしたの？」

「え？あ、ああ。何でもないよ。」

そう言って目を逸らす。心なしか頬が朱い。うん。可愛い。

私は頭の中でリイナを愛でることにした。

――総員、用意！試験開始！――

合図と共に生徒達がエメラルの森へ滑り込んでいく。・・・と言っても実際に滑っているワケじゃないのだけれど、その表現がぴったりフィットする程に生徒の達の動きは滑らかだった。

ある者は巨大な戦斧を携えて。

ある者は頑強な盾を担いで。

ある者は僕の使い魔と共に。

単身で、複数で。

エメラルの森へと踏み込んでいった。

「ハア！」

身体能力強化の魔術により強化されたしなやかな体躯が伸びる。  
その動きに呼応して遠心力によって勢いの乗ったトンファーが繰り  
出される。

ーギャアアアアー

断末魔の悲鳴を挙げ、4体目のオークが地に伏した。

「まあ、こんなもんかな？」

セルフイが犬歯を覗かせて爽やかに笑う。

あれ？何かキャラ変わってない？いいえ、気のせいです。

「しつつかし、こうも立て続けに魔物のパーティに当たってたら、こ  
っちの魔力が持たんな。」

「それには同感。僕の高圧水は付与範囲をファルシオンの刃だけに  
絞ってるからいいようなものを……。」

セルフイの呟きにファルシオンに付いた血糊を拭いながらハリス  
が答える。セルフイこそまだ体力に余裕が有りそうに見えるものの、  
ハリスは肩で息をしている。

無理もない、森に踏み込んで3時間足らず、もう既に46体の魔  
物とエンカウントしている。実に10分に3体の魔物と対峙してい  
る計算になる。

「此处で一旦休もうか？私が結界張っておくから。」

「いや、まだいける。大丈夫だよ。大丈夫。」

自分に言い聞かせるように言った後、ハリスはファルシオンを肩  
に担ぎ立ち上がった

「無理はしないで、ね？」

私はハリスの体力的な面から休んだ方がいいと思っている。が、  
ハリスはまだやる気があるので、説得は諦めた。最も、説得らしい  
説得はしていないのだけれど。

「リイナ、まだオーブの反応は無い？ 此処まで多いと近くにオーブが有りそうなもんなんだけどな。」

「オーブの反応は無いよ。ちょっと気になったんだけど、エンカウントする魔物でもオークが異常に多い気がしない？」

「確かに、今までの8割り方はオーク系だったな。まあ、遠距離攻撃はしてこないから闘い易くていいんだけど。これが弓も使うゴ布林系だったら面倒なことになってる。」

「……とりあえずオーブの探索を進めよう。」

「了解」

私達は再び歩き初めた。オーク系との異常なまでのエンカウント率。手付かずの美しい自然を残すエメラルの森ではあり得ないようなことだ。

これは……誰かの作為？ 考え過ぎだろうか。

今現在、“イヴァン帝国”改め“ファレノプシス王国”は、“ジークエイム帝国”との抗争状態にある。未だ精霊魔術や、召喚術、神通力など古代より伝わる古代霊渉魔術を振興してきたファレノプシス王国は、近代技術の魔術機甲を興してきたジークエイム帝国に隣接し、その侵略に脅かされていた。

そこでファレノプシス王国は同じくジークエイム帝国に隣接し、その脅威に晒されている“イスファリア王国”と“ヴァレン連合国”、そして同じくイヴァン帝国の流れを汲む“ヴィルヘルト合衆

国”・“エカタイト王国”・“モルティア共和国”と“対ジークエ  
イム武装経済同盟”を組み、長きに渡り小規模な戦争を繰り返して  
きた。“中央抗争”と呼ばれているこの小規模連続戦争は、今現在  
小康状態にある。この状況を打ち破ろうとジークエイム帝国が水面  
下で動き出しているとの噂は絶えない。

（まあ、考え過ぎかな・・・？）

私はこの時、この思考を別段気にも留めなかった。

「ん、誰かいるよ。生徒だと思う。」

「どのくらい先だ？」

「300mぐらいかな。この大きな魔力は・・・、シエラ様だね。  
他に3名を確認。こつちにはまだ気付いてないみたい。」

「こつちはリイナのヒテユン・エリア隠忍結果もあるんだし、よっぱどのことがない  
と気付かれないでしょ。」

「それは当たり前でしょう？私はヘマはしない。」

「お、頼もしいね！」

ハリスが茶化す。からかわないでよ。

「リイナ、顔朱いよ？っていつか滅茶苦茶可愛いよ？」

「まあ、セルフィまで。集中が削がれるからからかわないでよ。」

「えゝ、だってリイナ可愛いんだもん。襲っちゃったぐらい。」

「え？！もう私襲われたの！！？」

剣を振り抜き、オークを仕留めた少年が叫ぶ。

「くっそお！何でこんなにオークがいんだよ！？」

「全く同感だ。“<sup>レスト</sup>焼却”。」

直後、黒髪の少女に斬りかかってきた2体のオークが蒼の火の玉となり、儚く消えた。彼女の火魔法に呪文詠唱によって概念を導いた魔導術はその概念に沿って顕れた。

蒼炎を纏う彼女は幻想的である。

「シエラ様、お美しいです！ですが、全てシエラ様にお任せするワケにはいきませんわ。<sup>グリーディ・ソイルドール</sup>“貪欲な土人形！”」

彼女の土魔法により形作られた土人形は呪文によりその概念を導き出す。鎧兜に身を包んだ土の鬼は餓鬼の如くオークへと襲い掛かる。オークは残り2体。人形は4体。数的な利を活かして殲滅に掛かる。

「エクス・スタート  
殲滅開始”！」

1対1で片方のオークを足止め、もう片方のオークに3体で掛かる。オークを囲むように位置を取り、タイミングを僅かにずらして攻撃を加えていく。1分とかからずにオークはこと切れた。

「流石だな、ファイア。」

「それほどでもありませんわ。残りは1体。どのように調理しましょうか？」

「魔獣ならばシチューが良かったんだが。」

「では、とりあえずミンチにしましょうか。」

「フフ・・・あんまりグロテスクなものはゴメンだぞ？」

「そうですね・・・。」

そう言ってファイアことファイアハは指先を器用に動かし、土人形に指令を送った。

「覗き見とは感心しないな。出てきたらどうだ？」

Wow！驚いた。私の隠忍結界を見抜くなんて。  
ヒデユン・エリア

「人数は・・・、1人かな？気配が消せてないぞ？」

「シエラ様、誰かいるんですか？」

「私が人形を使って見てみましょうか？」

1人つてことは気配が完全に読めてる訳じゃないのね。多分消せてないのはセルフイナ気がする。

「その必要は無いな。」

お！自ら打って出た！

「ほう・・・。確かセルフイナかいったな？」

「如何にも。私はセルフイナだ。さすがは“蒼焰フクロウ・シムヴァルツィアの黒竜帝”だな。  
“レスト焼却”の魔導術は見事だった。」

「それがどうした？術を誉める為にこちらの動きを伺っていたワケ

「じゃあないだろう?」

「まあ、ね。実は、共闘しないか、と話を持ち掛けようと思っ  
たんだよ。この先に湖がある。そこをBCにしようと思っ  
ているんだが、何しろオークの数が多くてね。こんな調子じゃ魔力切れを先  
に起こしてしまう。で、」

「共闘というワケか。」

そう言っ  
てシエラは何かを思案するかのよう  
に1度言葉を切った。

「……1つ聞きたい。お前は1人で此処まで来たんじゃない  
だろう?他のメンバーはどうした?」

「ああ、言い忘れたが、あんたと共闘するにはもっと大きな理由が  
ある。それは私のメンバーが危惧していることなんだけど、とりあ  
えずは可能性として想定していることであるから、確実になりそう  
ならば伝えよう。」

そう。その後、オークの数が異常に多い理由として、私はジーク  
エイム帝国の侵略があることをセルフイとハリスに提案した。

実際に他国の侵略があつた場合、試験中の生徒の安全を確保する  
為に教師はすぐに念話によつて撤収を伝え、エメラルの森に散らば  
っている生徒を回収しに来るはずである。しかし、その様子は無い。  
ということとは考えられる可能性は2つ。

1つはただ単に今年はオークが大発生しているだけであるとい  
うもの。

もう1つは、もう既に森の外で待機している教師陣営が攻め落とされ、森に入っている生徒の殲滅の為にオークを大量に放ったという可能性。この場合、出発地に戻ったとして、それは自殺行為である。敵の手中に自ら飛び込むようなものだ。此処から本国に救援を求めたとして、その時には既に本国にはジークエイムの本隊が到着し、攻略を始めているはずなので当然その懇願は黙殺される。詰まるところ、その場合に生き残るには、教師がエメラルの森に張った結界が解けている可能性に懸けて、エメラルの森の奥へと進んでいくしかないのだ。

「答えになってないな。けど、その台詞からメンバーは最低でもお前を含め3人か。その大きな理由とやらが気になるが、まあいいだろう。さすがにこうも魔物が多いと私とて疲れるからな。」

「え、シエラ様、良いんですか？」

「何か企んでいるかもしれませんが。その大きな理由とやらも聞き出しておいた方が宜しいと思いますの。」

「かまわない。」

「しかし!」「」

シエラ様の腰巾着一(?)は挙って反対。本気で心配しているのかな？

「つたく、うるせえなあその2名。シエラもいって言ってんだからいいじゃん。」

「な・・・、なんですって?!」

「もういい。恐らく大きな理由とやらはオークの異常な数に関係のあることだろう。気にするな。」

「「え!?!」」

「おお。よく分かったね?」

まあ、少し考えれば分かることだと思っよう? 私は。驚くまでもない。

「当たり前だ。それと、今若干素が出たな。」

フフ、と、可笑しそうに笑うシエラ様。綺麗だよねえ。見とれちやう。

「と、ゆうワケで共闘だ。しかし、そちらから持ち掛けておいて姿を見せないというのは些か無礼ではないかな?」

その台詞を聞いて、私はヒテュン・エリア隠忍結界を解除した。

「はあ、結局何人か、っていうところまでは気付かれなかったね。さすがリイナ。」

「え? べ、別に私は・・・」

「ハハ、リイナ人見知りだもんね」

「・・・・・・・・・・」

だから、からかわないでよあ。

「クク、水の天才に隠れた鬼才か。結構なメンバーだな。」

「お？リイナって何気に有名なんじゃない？」

「僕は既に天才として知られてるからね。でも、リイナが鬼才として知られてるとは……。意外だね。」

うつ、もうヤメテ。

「あゝあ、ハリスのせいで黙っちゃった。」

「僕のせい？」

「お前達も黙れ。じゃあ、どうせだから自己紹介といこうか。」

始まるためのエピソード1（後書き）

やっぱり話の運びに無理があるなあ。

## 始まるためのエピソード2（前書き）

段々と慣れてきた気がします。まだまだ稚拙な文ですが、生暖かく見守って下されば光栄です。

若干百合入ります。

## 始まるためのエピソード2

「じゃあ、私から始めようか。」

シエラ様が纏める。

「私はシエラ・ディア・イヴァン・アレスティア。名前から分かる通り王族だ。特異形質は“殲滅の蒼焰”。炎、攻撃型の魔導術が得意だ。一応ランスを扱う。」

1つの属性に特化している人は、一目でその人と判る特異形質が魔法・魔力に顕れる。次はセルフィかな？

てかシエラ様が私を見てる気がする。

「私はセルフィ。セルフィ・リン・ミハイルだ。魔法は水と風で、近接攻撃型。身体能力強化の魔術をよく使う。トンファーが得物だ。」

「僕はハリス・フェア・チャイルド・メルキュリア。特異形質は“深浸の泡沫”。水魔導術が主だね。得物はファルシオン。」

「じゃあ、次は俺な。」

銀の短髪の少年が言う。他のクラスの人だから顔に覚えがない。

「俺はアクト・ディ・クラティス。風・炎の魔法を使う。魔術に関してはあの学校で履修したものは一通り使えるつもりだ。得物はバスタードソード。」

「私はファイアハ・レム・クライ・タリタジムですわ。特異形質は“わたくし形骸を求めし土”、地属性の魔法です。マリオネット“人形使い”が得意な魔導術ですわ。得物はワンド。以上。」

あゝ、私の番だ。こんなので緊張する私って……。でもでも、王族の方も居るんだし、緊張するのは当たり前よね。なんかシエラ様がさつきから舐めるように私を見てる気もするし。自意識過剰？

「え、えっと、私はリナリア・エル・シルヴィア・アイゼンハウルといます。特異形質は“理を穿つ紫電”です。魔術に関してはある程度できるつもりです。タルワールを使います。」

ん、ちゃんと言えたみたい。一先ず乗り切った。

「よし、自己紹介も終わったことだし、早速湖目指して出発しますかね。」

セルフィが立ち上がりながら言った。そういえば、セルフィは丸い石に座ってたんだ。

他のメンバーも順々にセルフィについていく。

「ねえ、君がりナリアかい？すごく綺麗だね。あっちのしゃしゃり猫とは大違いだ。」

私も出発しようとした時、耳元で心なし艶っぽい声が聞こえた。思った瞬間、

「えーちよ、シエラ様？！っひあ？！」

いきなりシエラ様に後ろから抱き締められた！

で、耳をあまがみされた！はむって、なんかはむってされたあ！

もう“しゃしゃり猫ってセルフイのこと？”とかどーでもいい。  
なんでこうなってるの？！

156？の私に比べてシエラ様は10？近く背が高いから、シエラ様に包まれてるカンジ。これはこれでいいかもって思う。端から見たらなんかもう百花繚乱って雰囲気なんだろうな、これ。主に百合が。

でも他のメンバーは先を歩いているからこの光景は見えていない。  
セーフ。

「リナリアの肌、すべすべしてる……。」

シエラ様の指先がスカートから露出している私の太ももをなぞり上げていく。気持ちいい。

「んん……。あっ！」

耳を舐められた。なんか気持ちいいようなくすぐったいような変な感じ。

私が思わずあげた嬌声に満足したのか、シエラ様は離れていった。

シエラ様って……。あっち系？

「リナリア、どうした？遅れるぞ？」

まるで私の心の声が聞こえたかのようなタイミングでシエラ様が振り向いた。白々しい。

「いえ、なんでもありません。」

ああ、今の私、絶対に顔真っ赤になってるよなあ。

その後、湖までの道のりで、オーク12体とコウモリ型の魔獣2体を倒し、湖に到着した。

ここまで来て、私の危惧が当たっていることが証明されてしまった。

湖は教師が張った結界の外にあるのだ。

「リイナ、これは……。まさかとは思ったけど、そのまさかとはね。」

セルフィが隣で囁いた。

「うん。ちょっと、いや、かなりマズイよ。」

「なら、今日の夜に話すか？」

「うん……。」

そこで、ハリスの声がした。

「おい、リイナ、セルフイ！テントは此処ら辺で平気かな？」

「テントじゃなくても、私の地魔法で簡単な建物なら作れますのよ？」  
「？」

「お？それならそうしよう。そっちの方が安全だしね。それと、なるべく目立たないようにな。」

私達2人の雰囲気から、およそ掴み取ったらしく、ちゃんと注意してくれた。

「では、周りの風景と比べて違和感がなければいいのですわね？」

「そ。」

「では。」

フィアハがマリオネットを操るかのように指を動かす。

「形を持って、“形骸を求めし土”よ。我が創造を具現化せよ。」

ファイアハが言霊を解放すると、土が形を変え、質を変え、背後の壁と一体化した。下には苔と樹木に隠れるようにして、人1人がころうじて入れるような穴が開いていた。

「おお！すごいな、ファイアハ！」

セルフィが目を輝かせている。これなら大丈夫そうだね。うん。

「さすがだな、ファイア。とりあえず休むか。」

「ふあゝ、驚いた。ファイアちゃんすごいね。」

ハリスも目を丸くしている。

「それほどでもありませんわ。」

でも得意げ。なんか可愛い。綺麗な金髪がしゅらんと揺れる。

私達はシエラ様に続いて、暫く、と言っても私の予定では3日間、滞在することになる拠点へと入っていった。

「おお！ちゃんと部屋に別れてる！」

セルフィがはしゃいでる。目がキラキラ。

「これは・・・、すごいね。」

ハリスは呆然。

つまり、この拠点の内部はすごい！とにかくすごい！

1 . 各部屋にドアが付いていて、横にスライドして開閉できる。

2 . ダイニングとなる場所には備え付けの長机と長椅子。

3 . キッチンにはシンクも付いていて、水があればちゃんと流れるようになってる。

4 . トイレもある。

5 . ダイニングとトイレを除いて部屋は6つ。全てダイニングに直結し、各部屋にベッドと簡単なタンスが付いている。

6 . 倉庫が2つ。片方は冷蔵庫として使える。

つまり、本当に“拠点”として使えるのだ。これはかなりの間持ちそう。

そこで、私は急遽予定を変更。この拠点を移動式にして、なるべく長く使うことにした。

「とりあえず、それぞれの部屋を決めよう。キッチンに向かって右側の部屋を？、そこから時計回りに？？とする。私は？に入ろうと思う。いいか？」

やっぱり仕切るのはシエラ様だね。でも、王族って皆あんなにリーダーシップあるのかな？

「いいと思いますよ？じゃあ僕は？番取るけどみんなOK？」

「じゃ、私は？。これは譲らないぞ？」

「なら俺は？だ。」

「わたくし私は？でも？でもどちらでも構いませんわ。リナリアさんは何処が宜しくて？」

とある王族のひとの視線を痛いほど感じる。なんか怖い。これっ  
てもしかすると選択肢間違えたら死亡フラグ立つパターン？

「じゃ、じゃあ私は・・・、」

視線で殺されそう。

「・・・、？番にします。」

・・・、助かった。どうやら死亡フラグを回避したらしい。  
でもこれって替わりに百合フラグ立ったよね？

「よし、決まったな。」

しらっとシエラ様。んゝなんとも言えないこの感情。シエラ様が  
微笑みを向けてくる。はあ。

「日が落ちるまであと3時間程ある。その間に食糧等調達しにいこ  
うと思うのだが、誰か付いてくるか？」

「じゃあ、僕とアクトがいくよ。僕は薬草とかも手にいれたいから  
ね。」

「ああ、俺も薪とかが欲しいからな。いいですよね？」

「構わない。よし、時間を有効に使う為にも、さっさといくぞ。」

「了解」

ハリスにはもう一つ、結界の自律稼働を補助するための薬草もお願いした。さてと、準備準備♪

「ファイア八さん、ちよつとした提案があるのですが・・・？」

「ん？なんでしょう？」

「実は・・・」

私はこの拠点を移動式にしたいこと、何故ならこれがの異常事態がジークエム帝国の侵略の可能性があり、追手が来る可能性があること、その追手の狙いは恐らく王族であるシエラ様であることを話した。

「っ・・・？！！そんなことが・・・。」

ファイア八は創造以上に驚いていた。少し考えれば分かりそうなものを。ちよつと鈍すぎやしないかい？

「分かりましたわ。協力しましょう。・・・、ですが、何故私わたくしのこの形骸をこれからの拠点に？」

「それはね、この拠点の外見が、エメラルの森の中だと良い保護色になるからだよ、ワトソンくん♪」

「・・・それならもつと良いモノを作りましたのに。」

フィアハは少し残念そう。でもこれ以上大きいと準備に時間がかかる。別に一生を此処で過ごすワケではないので、このくらいが丁度だと思う。

「まずはこの形骸の範囲を知りたいんですけど・・・。」

その後、私はフィアハと一緒に部屋を回り、おおよその見当をつけていった。

次は外回り。こちらは定置継続範囲魔術の目安をつける。

内側と外側からの異なる継続範囲魔術を作用させ、この建物自体を亜空間とし空間移動能力を付与させようと目論んでいるのだ。

一通り散策を終え、私はこの拠点の構造を図面に描き起こす。そして作用させる魔術を図面に書き込んでいく。非常に脳を酷使するので精神的な疲労が溜まる。

「ん？リイナ、なにしてんだ？」

自室に閉じ籠って、来るべき時の為に！とか大仰な台詞とと共に安眠を貪っていたセルフイが出てきた。少し眠そう。

「此処を移動拠点にしようと思ってね。そのための術式を書き起こしているトコ。」

「相変わらず凄いねえ、この技術。現役の結界魔導師が見たらどん

な反応する事やら。」

それは自分でもたまに思う。

私は結界魔導術に関して、いくつもの新たな発見と、技術化、概念化に成功している。技術化というのは誰もが使える術式の形にする事。概念化はその術式のイメージを明確化、確定し、術式の他に詠唱、印に由つても発動できるようにする事。概念化すると、自分の力量次第では、その術式の大幅なアレンジが可能になる。自分のその術式に対する概念を変えるだけだからね。って言ってもこれかなり難しいから、できる人は限られてるんだけど。因みに私は簡単にできます。

「フフ、まあね、私はこれに関しては天才的だよ。」

セルフィに自慢気に返す。

「はあ、この他の魔術に関してもリイナは天才なんだから。もう鬼才って言った方がいいね。これはホント驚異だわ。」

「魔術は面白いから。ついつい夢中になって、気付いたら此処まで出来るようになってたからなあ。特に自覚は無いんだけど。」

「この天才め。」

セルフィはそう言って、自分の持って来ていた水筒に口を付け、グイっといった。

「あれ、他のみんなは？」

「食糧その他諸々採りに行ったよ。ファイアハさんは残ってるけど。」

寝てたんだから知らないよなあ。

「へえ。」

そう言ってセルフィは下の倉庫に降りていった。

その後も私は黙々と作業を続けた。途中でファイアハが様子見に来て、私が組み上げていく術式を見て驚いてくれた。そりゃあ、今現在、失われた魔導術ロスト・マジックこと古代魔導術に迫る巧緻さなのだから当たり前なんだけど。

「リナリアさん、ハーブティーですわ。多少疲れは取れるのではと思いますして。」

「ファイアハさん？ありがと。」

香りの良いハーブに癒される。私はもう暫くこの恩恵に預かることにした。

「クツ、ふざけるな！我が業火に焼き尽くされたいか！」

私は右腕と握るランスに魔力を通し、放出させた。蒼い焰が右腕と手にしたランスを覆う。

「喰らえ！」

身体を捻り、バネを利かせて体重をかけ、右手のランスを突き出す。蒼焰が鋭く集束し、高密度のエネルギーとなって対象へと吸い込まれていく。

しかし。

ーギイイインー

高い金属音を響かせてランスが弾かれる。

「クソ！」

「こんなに強いとはね……。流石は竜種、とでも言うべきかな。」

「おい、ハリス！余裕ぶっこいてなんか策でもあるのかよ?!」

「無いね。此处まで堅いと、どう手を付けていいのか分からないよ。」

男二人が言い合いを始める。食って掛かっているのは主にアクトなんだが。

今現在、私達は甲羅を持つ竜種“甲羅竜”《パンツァードレイク

《と対峙している。全長6mを越える、小型のC級の竜種だ。その鱗は非常に堅く、大方の攻撃は跳ね返してしまう。》

魔物はE級〈A A A級・S級・S S級・S S S級・G級・Z級の20の階級に分類される。文字が若くなる程、文字の個数が大きくなる程、その魔物は強力である。〈例えば、C級〉C C級〉C C C級〉B級。〉また、S・G・Zが付けられている魔物はワケ有りであつたり、非常に強力であつたりするのだが、それはまたいつか。

とにかく。このC級の魔物は教師達が張った結界の内にはいない生徒達が力を合わせたところで、たいしたダメージを与えられないからだ。

・・・何故？

「兔にも角にも、此处をどう切り抜けるかが問題だな。」

脳裏をよぎった微かな疑念を振り払い、私はランスを左手に持ち替えた。再び魔力を集中する。その間の時間稼ぎに、と、アクトが飛び出していく。

「疾き風よ、渦巻く大気よ。我が剣を覆い、対象を切り裂け！ “ウインドブレード・ハヤテ”！」

真空の刃がアクトの持つバスタードソードに絡み付く。その風は更に勢いを増し、巨大かつ鋭利な大剣へと集束する。

「せああああああ！」

気合いと共に降り下ろしたのは鱗と鱗の間。此处ならば攻撃が通

る、とでも思ったのだろうか？しかし、鉄壁の竜はそれすら跳ね返す。

「クソ！」

「プレス来るよ！アクト、横に回り込め！」

「おう！」

竜が口を大きく開け、その中に金属の渦が発生する。それは球を形作り……

ーゴアアアアアアアアアアアー

巨大な破壊を具現化した。

「うわ〜。」

「ハリスとやら、随分呑気だな。」

私はプレスの威力に感心しているハリスに言った。

「まあ、何回も実戦を積んでるとあまり驚かなくなりますよ」

「？以前コイツと対峙した事があるのか？」

「いいえ。僕の勘が勝てないって言うてるんで、逃げる方法を模索しているだけですよ？」

答えになってない気がするのだが。

「なら、次の私の一撃の後、奴を迂回して逃げるか。大きな衝撃で怯ませる。いいな？」

「ええ。」

では。

「力を解放する！竜撃爆破“ドレイク・エクスプロード！”」

溜めた魔力を拡散・膨張へと指向させる。魔法には本来詠唱は要らないが、発動にはその魔法の概念がある程度強くなければならない。そのために、ちよつとした詠唱（らしきもの）をする事はある。

兔にも角にも、私が解放した魔法は狙い変わらず大きな爆発と爆音をもたらした。

「よし、今だ！退散！」

私達はその竜からいち早く逃げ出した。

無論、今まで集めた物資（？）も忘れずに。

「おい、リイナ、ハリス達が帰って来たぞ！」

「ん。」

私は仕上がった外壁の継続範囲魔術の微調整を終え、シエラ様御一行を迎えに行くことにした。因みに内側は既に終了している。外壁は周囲の風景に合わせ、外見が変わり、その場所に溶け込めるようになっていて。所謂保護色である。

「リイナ、ただいま。」

暢気にそう言ったのはハリス。その他二人は若干疲れているみたい。なにがあっただろうか？

「なあ、俺達、C級の魔物に襲われたんだけど。なんであんな竜種が此処にいるんだ？」

アクトが疑問を漏らす。

「結界の外だからに決まってるだろ、バカ。」

Wow！セルフィいきなり暴言。なんかセルフィって登場する度にキャラ変わってるよね。

「で、竜種だって？お前ら勝てたのか？」

「無論逃げて来たよ。あんなの勝てるワケないし。」

「だろうな。実戦は初めての連中2名を連れながらだと、気が気じゃないもんな。片方お姫様だし。」

おゝいセルフイ、それ地雷だよお。

「な・・・?!やはりお前達、竜種と対峙した事があるのか?」

案の定、シエラ様が食い付いて来た。旧イヴァン帝都学院の校則に、【卒業まで教師の監督下以外での魔物討伐及びその他の一般依頼の受容を禁ず】とあるのだ。バレたら校則違反で点数が引かれる。しかし、これは生徒の安全を第一に考えた結果であるので、下手な事は言えない。

「ああ、CC級の“装甲竜”《ファランクス・ドレイク》を狩った事があるぞ?まあ、2日掛けて罠に嵌めて倒したんだけどな。」

「な・・・!?!」

「アイツの鱗が欲しかったんだよ。籠手を作るのにね。今填めてるコレがそう。因みにハリスの鎧とリイナの左足のレギンスも装甲竜の素材を使ったやつだ。」

おいおい、言ってくれるじゃないか。

「ふむ、中で詳しく聞こうじゃないか。」

生徒会長でもあったシエラ様。校則には厳しいのです。でも、此処で格上の相手とどう対峙すればいいのか皆に知って貰うのもいいかな?いずれは多数の敵への対処法も知って貰わないとなあ。

とか思いつつ、私達は拠点へと戻って行った。

始まるためのエピソード2（後書き）

ああ、早く本編（第一章）入りたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0438y/>

---

此处から始まる物語

2012年1月8日02時49分発行